

平成26年度文学研究科共同研究 研究成果報告書

申請者氏名	山田 雄三
-------	-------

研究課題名	逐語訳・意識・翻案—日英米モダニズム文学を翻訳する際の理論と実践
-------	----------------------------------

研究組織

氏名	所属機関・部局・職名	専門分野
山田 雄三	文学研究科・准教授	英文学
片渕 悦久	文学研究科・教授	米文学
DeVore, Trane	言語文化研究科・特任准教授	英語圏文学
Murakami-Smith, Andrew	言語文化研究科・准教授	比較文学
Angles, Jeffrey	Western Michigan University・Department of World Languages and Literatures・Associate Professor	日本文学
高野 吾郎	佐賀大学・医学部・准教授	米文学
McKnight, Anne	白百合女子大学・英語英文学科・准教授	比較文学
中嶋 彩佳	文学研究科・博士課程後期	英語圏文学

※1行目に研究代表者（申請者）を記入してください。

※本学関係者については所属機関（「大阪大学」）は省略してください。

研究の目的・計画

**【研究の目的】**本共同研究は、おもに20世紀以降にアヴァンギャルド詩や短歌、俳句の相互参照が顕著となる日英米のモダニズム詩および現代詩を対象として、英語と日本語とのあいだの文法や音韻を含む言語距離を測定したうえで、「逐語訳」「意識」「翻案」を実験的に試みる翻訳実践を共同で行うことをその目的としている。また、この実践をとおして、オリジナルと翻訳との距離を縮めるためには、どのような共通項を作るべきか、その条件を抽出することを目指す。さらに、日本語を意識した英語詩、英語を意識した日本語詩（わたしたちはこれをバイリンガル詩と名づける）を分析することで、グローバル時代の新詩体の特徴と可能性を考察したい。

**【研究計画】**平成26年10月までに、研究対象とする詩人の詩集、ならびに翻訳理論に関する文献一覧を作成し、研究組織内での情報の共有を図る。また11月に国内の共同研究者全員が大阪大学に集い、研究会の機会を持つ。この会ではまず、共同研究者全員にそれぞれ担当の研究対象について、研究進捗状況の報告をしてもらう。また平成27年3月上旬までに国際ワークショップを開催し、翻訳の実践と理論に関する新しいアジェンダ構築を目指す。

## 研究成果

本共同研究では対象を「モダニズム詩」および「バイリンガル詩」としていた。村上春樹の小説は各国語に翻訳され、世界中で大きな市場を形成しているのと対照的に、日本の実験的な「モダニズム詩」は翻訳される機会がなく、ほとんど知られていないのが実情であるからである。同じことは21世紀の英米の「モダニズム詩」についても言える。また詩人 Nanao Sakaki に代表される「バイリンガル詩」は、日本語のシンタックスをもった英語詩行、英語の音韻に似た日本語詩行を特徴とするが、いまだ本格的な分析を受けていない。これらふたつのタイプの詩を対象として、翻訳実践と理論構築を目指した。

日英の翻訳実践と理論に関しては、Donald Richie、Cid Corman、Gary Snyder、Joanne Kyger などの先行的な仕事がある。こうした先行研究の知見を引き継ぎながら、本研究では現在のところ、日本文学を英語で翻訳する訳業では高い評価を得ている翻訳家 Jeffrey Angles の研究協力をも得られることとなった。（Angles は伊藤比呂美の詩の優れた翻訳にたいして、The 2009 Japan-US Friendship Commission Prize を受賞している。）Angles は翻訳実践のみならず、Western Michigan University において翻訳理論の教育と研究でも豊富な実績をもっている。本研究では Angles の仕事を検証することから始めて、シンポジウムのテーマを「バイリンガリズム」「世界文学」「翻案」「翻訳しえない残余あるいは雑音」に設定した。

予算と日程が折り合わず、国際シンポジウムに先立ち、国内での研究会を開催することはかなわなかった。そのためシンポジウムに向けてメール会議等を行い、対象とする作家を伊藤比呂美、村野四郎、それに詩人ではないが翻訳を考える上で有益と思われる Kazuo Ishiguro 等に絞って、考察することに決めた。

平成 27 年 1 月 10 日に、本共同研究を総括するためのシンポジウムを大阪大学文学研究科にて開催した。その際のシンポジウムのタイトルを “Itinerant Tongues: The Glorious Noise of Literature in Translation” と定め、翻訳しえない残余部分 (noise) の処理と可能性について討論する機会を得た。シンポジウムの概要は以下の通りである。

基調講演となる Angles の講演では、翻訳理論の変遷および翻案の功罪について重要な知見を得た。さらに翻訳の姿勢として Angles が提示した仮説、「翻訳のシャーマン（巫女性）」は翻訳の倫理を提示している。中嶋の Ishiguro 論も別の角度から翻訳の倫理を示している。日本を舞台とした小説であっても、英語から日本語に翻訳する際に、日本らしくしすぎるのが原作の意図を歪めている点が明らかとなった。高野は村野四郎という詩人本人の詩論に基づく英訳を実験的に試みた。McKnight は手塚治虫などの SF マンガにおける空想の事物や事象を英訳する場合の問題と可能性について詳らかにした。

以上のようにケース・スタディーズとしては重要な共同研究になったと思えるが、当初目指した新しい翻訳理論ないし翻訳倫理を構築するまでにはいたらなかった。

**研究発表** [①論文・書籍、②口頭発表、③研究会開催、④その他に分けて記入してください。]

② 口頭発表

山田雄三 「フリンジ・モダニズムの人称、時制、バイリンガリズム」

シンポジウム・秦邦生司会「「メタモダニズム」とは—現代文学とウルフそして／あるいはモダニズムの「継承」という問題」(第 34 日本ヴァージニア・ウルフ協会全国大会, 相愛大学, 平成 26 年 11 月 16 日)山田雄三

③ 研究会(シンポジウム)開催

An International Symposium “Itinerant Tongues: The Glorious Noise of Literature in Translation” (大阪大学文法経本館, 平成 27 年 1 月 10 日)

Program

Prof. Jeffrey Angles (Western Michigan University),

“Translator as Shaman, or the Art of Channeling Voices”

Ayaka Nakajima (PhD Candidate, Osaka University),

“Kazuo Ishiguro’s Pseudotranslation: The Japanese Translation and Reception of *An Artist of the Floating World*”

Andrew Murakami-Smith (Osaka University),

“Translation and Japanese Literature as World Literature”

Goro Takano (Saga University),

“What I Wondered How to Handle while Translating the Works of the Japanese Poet Shiro Murano”

Anne McKnight (Shirayuri College),

“In the Tenor of a Robot: How to Translate New Words for New Worlds in Science Fiction”